

NEW SONG

新生讚美歌ニュースレター

「浜辺の歌」～「ひとたびは死にし身も」をめぐって

谷本 仰（南小倉バプテスト教会牧師）

2011年の連盟定期総会三日目の朝の礼拝で、「浜辺の歌」～「ひとたびは死にし身も」のメドレーを演奏させていただいた。

「浜辺の歌」は1916年、秋田出身の成田為三作曲、林古溪作詞の唱歌。

1. あした浜辺を さまよえば 昔のことぞ しのぼるる／風の音よ 雲のさまよ 寄する波も 貝の色も
2. ゆうべ浜辺を もとおれば 昔の人ぞ しのぼるる／寄する波よ 返す波よ 月の色も 星のかげも

2011年3月11日に発生した大地震によって生じた大津波は、三陸の浜辺を直撃した。そして家族、親族、友人を奪い、思い出のつまった家や品々を押し流し「瓦礫」と化し、町の風景を一変させた。2ヵ月後によく訪れることができた被災地で、何一つなくなってしまった沿岸の町の跡に立って言葉を失った。そこに生きていた人々は、そこにあった生活は、町は、風景は…。地震、津波、そして原発事故で大切なものを奪われた人々にとって、それらの面影は、荒涼としたその風景の中で、いや、青空のもと煌く美しく青い海の光の中でさえ、重く悲しい思い出となってよみがえる。

そんな被災地に思いを致しながら「浜辺の歌」を、そして続けて新生讚美歌550「ひとたびは死にし身も」を、特に2節を意識しながら演奏した。

主の受けぬ試みも 主の知らぬ悲しみも／現(うつ)し世にあらじかし いずこにも み跡みゆ
昼となく夜となく 主の愛にまもられて／いつか主に結ばれつ 世にはなき 交わりよ

* 歌詞表記は『新生讚美歌』(2003)による

悲しい思い出だけが甦る荒涼とした浜辺の風景の中に、痛みを抱えてそこをさまよう人々と共に、主イエスは歩まれる。「浜辺の歌」に続けて演奏することで、この福音がはっきりと響いてくる。「み跡みゆ」のくぐりや、主イエスの足跡、歩みがそこにあることを示す。さらに今、この「みあと」は「み痕」でもあると思えてしかたがない。主イエスの十字架の傷痕がそこに口を開いている。そこで主は、傷を受けて痛み絶叫し泣きながら、共に歩んでおられる。そうこの賛美歌は歌っているように聞こえるのだ。

賛美歌の後、再び「浜辺の歌」の後半部分に戻った。浜辺の風景に思いを戻し、そこに主イエスの足跡、傷痕があるということを再び想起しながら、アーメンで締めくくった。

山中臨在師の文字通り呼吸を合わせながらのピアノ伴奏が、この演奏をさらに息の通ったものにしてくださった。感謝。

私たちの賛美や祈りや礼拝が、伝道や教育など教会の働きすべてが、この世界の痛みや苦しみ、祈りや歌や希望と響き合い、息を通わせあうものであるように。そのようにして、十字架と復活の主イエスとの生き生きとした交わりの中に、キリストの希望の身体として歩みたい。アーメン。

愛する子どもたちと賛美をともに 〈子どものさんび その選曲のポイントは？〉

小松澤 恵

(大久保教会音楽主事/小学校音楽科非常勤講師)

子どもたちの賛美の選曲にあたって、ぜひまず考えて頂きたいことは、「何のために教会で子どもたちと一緒に賛美をするのか」です。その目的を明らかにすることによって、その目的を満たすためにはどのような賛美を選べばよいのか、という答えがきっと見えてくるでしょう。教会での話し合いの参考となりますよう、いくつかのポイントをご紹介します。

生き生きとした音楽（賛美）体験を！

子どもたちが教会で、生き生きと神様を心から賛美して楽しい時間を体験できるような、また賛美する素晴らしさ、感動を体験できるような賛美を選びます。そのために子どもたちのわかりやすい歌詞か、共感できる歌詞か、そしてテンポも子どもたちが楽しく歌える速さか、などを考慮しましょう。わかりにくい歌詞の場合、少し説明を加えてあげることによって、み言葉のメッセージを伝えるよいチャンスになります。そのようなよい賛美の体験をすることで、神様を好きになったり、教会を好きになったりすることにつながります。

〈参〉新生586「すばらしいこの日」

教会で子どもたちが自己表現をする機会として

皆様の教会ではそのような機会がたく

さんあるでしょうか。賛美を通して、子どもたちが神様と「お話し」することができます。「神さまをほめたたえます」「愛します」「助けてください」など賛美の歌詞を歌うことを通して、自分の気持ちを表現する機会となります。

〈参〉新生645

「すべてをくださる恵みの神」

子どもたちの必要に応えるために

子どもの成長に必要なものとは何でしょうか。まず第一に必要な不可欠なものは「愛」です。神様に愛されている存在であることを子どもたちに賛美を通し伝えることができます。そのほか、神様に守られている「安心感」をもつこと、その上に養われる「自制心」や「協力の心」、聖書に基づく「おしえ」、また皆で練習し賛美の奉仕をする「達成感」、そのような子どもの必要に、賛美を通して応えられるように曲を選んで行きましょう。

〈参〉新生523「主われを愛す」

賛美を通して学ぶこと

たとえば小羊会の5つの約束「聖書を読む、お祈りをする、礼拝に出席する、献金をする、友達を誘う」これを賛美を通して学ぶことができます。また、音楽的には、「歌唱法や楽器の奏法を知る、リズムや楽譜の読み方を知る、音楽的な

創造力を養う」など音楽の基礎となるものを、子どもたちは、賛美を通して自然に学ぶことができます。最近の子どもたちは高い声が出にくくなっているように感じています。いろいろな高い声でアニメの物まねなどをしながら楽しく歌唱力を伸ばしてあげるようにしてあげてください。

＜参＞新生74「主に感謝せよ」
(カノンができます)

音楽を通して子どもたちの成長を助ける

たとえば賛美の音楽活動で、音楽に合わせて手をたたき、歩き、走り、行進し、スキップし、ジャンプしたりするリズムカルな動きなどは、身体の発達に役立つものです。またそのほか前述のように、霊的にも音楽的にも子どもたちの成長を助けていくことができます。

＜参＞新生31「ハレ ハレ ハレルヤ」
新生33「輝け主の栄光」

このように、私たちが子どもの賛美を選曲するとき、子どもと楽しく賛美できることだけではなく、その賛美を歌うことによるどのような目的をもって選んでいるのかを、もう一度改めて考えてみていただければ、子どもたちに賛美を通して何を伝えたいのかがはっきりしてくると思います。

それぞれの教会に与えられている子どもたちの現状をよく見ながら、

たとえば、今は神様に愛されていることをたっぷり伝えてあげる必要があるか、

或いはまた、共に教会で奉仕することの大切さを学ぶときなのか、などを見極めつつ賛美を選んでいきましょう。また教会の年間聖句や年間標語などを意識して、賛美を通してその事を深めていけるような選曲をすることも大切です。

最後に1998年に発行されたドイツの子供賛美歌 (Das Kindergesangbuch, 1998, Claudius Verlag) の序文の素敵な言葉をご紹介します。

『愛するこどもたちへ

歌うということはすばらしいことです。うれしいとき、その気持ちを表すには、ただ言葉でいうよりも歌ったほうが、もっとずっとよく表すことができます。悲しい時には、歌をうたうと慰めや喜びが戻ってきます。幾千年も前から、人間は神さまに祈り、そして歌ってきたのです・・・』

子どもたちの賛美を導く役目を与えられている私たちが、いつもこの序文のように「愛する子どもたちへ」という思いを持ち、まず私たち自身が日々新たに、神様を賛美するすばらしさに感動していること、楽しんでいこと。そうすれば子どもたちは、大人の賛美し礼拝する姿勢を五感全部で感じとっていきます。

そうは言っても弱い私たち。いつも神様に祈り、御霊によって信仰に生きる喜びと力と知恵をいただきましょう。そしてテンポよく、一つのことにあまり時間をかけすぎずにすすめることが、子どもを惹きつけておく鍵です。そして私の経験から言えることは「継続は力なり！」です。子どもが少ない…、子どもの賛美の声が小さい…、己の力の無さに落ち込む…など課題はさまざまにあります。けれども、あきらめずに続けていくときに真実なる主が豊かな祝福の実りを与えてくださると信じ、共に働き続けていきましょう！

新生讃美歌 73番 善き力にわれ囲まれ

訳/まとめ 内藤幹子（西川口／賛美歌検討専門委員）

2003年の『新生讃美歌』（2003）発行以来、「善き力にわれ囲まれ」は、たくさんの方に愛され、教会での礼拝のみならず大会・集会でもたびたび賛美されてきました。

ディートリヒ・ボンヘッファーによる詞は、本ニュースレター第9号に、北島靖士師による解説を掲載しており、『讃美歌21略解』（日本キリスト教団出版局）にも収録されています。しかし、曲については今までご紹介することができませんでした。

今回は、作曲家 Siegfried Fietz についてのWikipediaの記事を、賛美歌検討専門委員の内藤幹子師にまとめていただきました。Fietz氏の出版社ABAKUS Musik へのリンクもありましたので、URLもご紹介いたします、どうぞご覧ください！

Siegfried Fietz（1946年5月25日～） ウィキペディアより

http://de.wikipedia.org/wiki/Siegfried_Fietz

ドイツの作曲家、音楽プロデューサー。

金属工としての修業時代に得た賃金を費やし音楽を学ぶ。作曲を Gustav Adolf Schnemm に師事。1970年代初頭にはキリスト教系出版社 Hermann Schulte Wetzlar（今日のGerth Medien）に勤務するが後に独立し、妻と共に音楽系出版社 ABAKUS Musik を立ち上げる。同社は現在も音楽CDや楽譜集の販売、楽曲のインターネット配信などを手掛けている。1986年よりヘッセンのラジオ局において音楽番組「天地の歌」をプロデュース（～1996年）。

現代キリスト教音楽をリードする存在としてドイツ語圏において高い評価を受けている。多くの作詞家と組み、3000を超える楽曲を発表してきたが、その代表作はボンヘッファーの詞による賛美歌「善き力に我囲まれ」（詞：Dietrich Bonhoeffer）、「神の祝福があなたがたにあるように」（詞：Rolf Krenzer）、「時に君は天使を必要とする」（詞：Hermann Schulze-Berndt）などが挙げられる。また、聖書の人物や物語を題材としたオラトリオやミュージカルも数多く手がけている。ドイツ国内の各教派（カトリック、ルター派）キリスト教系集会に招かれ、楽曲提供者および音楽プログラムのディレクターとして活躍している。

Manuel Thaler 名義でCBS(Columbia Broadcasting System)とも契約を結び、「いつの時も陽光は約束のもの」（“Jeder Sonnenstrahl ist ein Versprechen”）や「リュックサックと節だらけの杖」（“Ein Rucksack und ein Knotenstock”）などの楽曲を発表。

2008年秋、作詞に Jürgen Werth, Detlev Block, Herrman Schulze-Berndt らを迎えた新作「天使がきみに出会うなら」（“Wenn ein Engel dir begegnet”）CD、楽譜集、プレゼント用書籍として発売。

更に造形作家（抽象画、木彫刻）としても近年注目を集めており、2009年には最初の展覧会が開催されている。

YOUTUBE／Fietz氏の演奏(73番) ⇒ http://www.youtube.com/watch?v=A_mkC9Eifa0